

# 変化は社会や家族から

35年にわたって全国のひきこもり当事者や家族の相談に乗ってきた山田孝明さん(71) 高知市が6冊目の著書「ひきこもり私たちの群像」を出版した。ひきこもりを「得なかつた理由や苦悩に思いを寄せないまま、ひきこもる人を否定的に捉える親や周囲の助言は、当事者に届かないばかりか自己を守る殻をさらに固くしてしまつと指摘。「(社会や家族が)言葉を変え

## ひきこもり伴走35年

### 山田さん(高知市)新著

れば(当事者は)自分の意思で出てくる」と述べ、変化すべきは社会や家族の側だと訴えている。山田さんは予備校講師だった35年前に不登校の少年と出会って以来、京都、名古屋、神戸市などを拠点に訪問や居場所づくりを続けてきた。関わった当事者や家族は50人以上。2021年に高知市に移住した。「ひきこもり仏」は山田さ



んの造語。1990年代に使い始めた。ひきこもることは傷ついた人が自ら回復していくための大切な過程」との考え方が当時は皆無で、マイナ

さんの「最も大切な存在として接してもらいたい」と考え、ひきこもる子を仏壇のご本尊に例えて表現。(家族の中で最も大切にされるべき人で、あなたたちの心の病理を、あなたたちに代わって背負っているかもしれない)と伝えたという。心の病理とは何か。解説文を寄稿した高知県立大の田中

「人知れず孤立している人が現実社会にいないことを記録し、記憶し続けなければ今後につながらない」と語る山田孝明さん(高知新聞社)

きよむ教授は「進学、就職するのが当たり前」といった画一的な価値観に適合できない人を排除する風潮を、「社会の病理」と指摘。社会の病理にあらがうはずの家族までもが病理に言われ、ひきこもる子をマイナスの存在と捉えて「ちゃんとしなさい」と言い続けた結果、自己防衛の殻をつくつてうずくまっている姿こそが「まさに、ひきこもり仏だ」と評している。本書で十数件の事例を紹介した山田さんは、孤立し高齢化する親子に寄り添ってき

た。多くは行政の窓口に行かず、周囲にも相談しない。「権威ある人の言葉で否定され、傷ついてきたから」と山田さん。田中教授は「支援とほ何かを考える意味でも行政や福祉関係者の必読書」とし、「専門職以外の人にも読んでもらえれば、ひきこもりの人が安心して暮らせる社会に近づく」と話している。

(早崎康之)